

7月1日

13時仙台到着。すぐに仙台市太白区のYMCA西中田保育園へ。仙台市の中でも内陸のこの園は、地震や津波の影響はうかがえないが、ホンの5分も車で海岸方向に行くと被災地になる。職員の中にも親を地震で亡くした方もいて、その方はいまだに11日は勤務に出られないという。保護者の中に肉親を失った方もいるとの話だった。

8月の子育て相談・保育相談を開催してくれる園を探して下さるよう、願います。

17時から「災害子ども支援ネットワークみやぎ」の小林純子さんに会う。災害支援の窓口となって、被災地のニーズに応じて支援物資を運んだりしたが、いまは仮設の人たちの支援に力が必要という。これからは仮設支援をどう作って行くかが課題だが、仮設にも入っていないくて、普通のアパートなどに移り住んでいる人はもっと見えにくい。それらの方々の支援ネットを作ることも課題という。

19時からここねっとの佐藤秀明理事長と保育心理士の小林今日子さんと会う。佐藤理事長は今日も七ヶ浜の避難所からの帰り。七ヶ浜は震災直後から保育心理士が入って避難所の子ども支援を同じ人が継続して実施してきた貴重な場所。

ここで興味深い話を聞く。七ヶ浜の避難所に佐藤さんのつながりでメティスさんという外国の歌手が訪ねてきた。その時に、七ヶ浜に津波をかぶったピアノをみつけ、メティスさんはそのピアノで歌いたいと言ったという。佐藤先生は、急遽ガレキ撤去中の重機を止めて、ピアノを保管してもらい、その間にピアノの修理をする資金を出してくれるところを探した。実際には買う以上のお金がかかる。結局日赤が出してくれることになり、ピアノは浜松に運ばれて、今修理中である。

メティスさんはその時に子どもたちと歌を作ってくれた。それを、今度7月23日に来てこのピアノを使って子どもたちと一緒に歌い、CDにするための録音をするという。このピアノは23日に録音に使った後、持ち主からは寄付されることになっているが、どこに置くかいま検討中。そこで佐藤先生には腹案がある。それは「このピアノを据えて、震災復興のための子どもセンターを作りたい」ということである。

7月2日

震災後支援、仙台2日目

午前中は今回のロードプロジェクトの協力者、発達障害児の支援センター（ここねっと）に出向き、セラピーの実際を見学した。

昼からは佐藤先生と七ヶ浜の子どものスペース3か所を訪ね、3月から子どもたちとずっと関わってきた保育心理士3人に会って話を聞く。

子どもたちの様子を見学するとともに、本当に被災した地域を目の当たりにし、津波の大きさを想像する。ガレキ撤去のボランティアの姿もたくさん見える。ここのボランティアセンターはしっかりと統括がなされ、倉庫やボランティア宿舎も活気があった。

しかし、そこから車で1時間。東松島に移動すると、ほとんどゴーストタウン化した町に、すさまじい爪痕がまだ生々しく残っている。



1階ががらんどうになった家屋が続く一角に言葉を失いながら、佐藤先生がかつて教員だったところに勤務した鳴瀬第二中学校に寄る。今は使われていないため、津波の爪痕がそのまま残っている。体育館の中は卒業式の赤白の垂れ幕がそのまま無残に垂れさがっていて、どこから流れ込んだものか大木がまるごと横たわっている。

3月11日は卒業式だったので生徒は学校には残っていなかったことが幸いしたが、数名残っていた生徒は裏の校舎の2階に避難し、そこでSOSの張り紙をして救助を数日間待ったという窓もそのまま。

最も津波の直撃を受けた位置にある2年1組（2階）の黒板には「3月14日」の表示があり（3月11日のあとは土日だから次の登校日は3月14日のはず）、「今日から最上級生・・・」との言葉が書かれていて、その黒板のまん中あたりに、津波の跡がある（2階ですよ!）。



最も直撃を受けた2年1組



2年1組の黒板には、3日後月曜日の日付と最上級生の目標が。その真ん中に津波の跡。



鳴瀬第二中学校（爪痕生々しく）



生徒が残っていた教室。SOSの張り紙。

さて、そのあとに行ったのが石巻の大川小学校。今回の保護者支援のなかでも最も緊張する場である。保護者が集まっている公民館に向かう。

20人ほどの保護者が福地公民館に集まっている。保護者同士で立ち話することはあっても、きちんとした話し合いを持つことも、また支援が入ることも今までなかったという。佐藤先生が大川小学校の卒業生でもある人から依頼されて入ったことで、やっと話し合う場が生まれつつある状況の中であった。この今は東京にいる卒業生と2人の子どもを亡くされご自身も他校の教員であるご夫婦が中心になって、「なんとか真実を知りたい」「もとの大川小学校の保護者同士のつながりを取り戻したい」と願っている。

生き残った子どもへのスクールカウンセラーの配置はあるものの、子どもを失った保護者へのカウンセリングなどはゼロ。保護者支援に臨床心理士が入ったこともないというのです。さらにこの地区、実際に子育ての中心になってきたのは祖母だったが、おばあちゃんたちは、両親が勤めに出たあと仏壇の前で毎日放心状態で泣いて過ごしている。外に一步も出なくなった方もいるが、だれも支援の手は差し伸べていない。

全学年108名中生き残った子ども34名、未だに行方不明6名、死亡68名という数字はあまりに痛い。しかも、救えたはずの命であったことが、様々な証言から明らかになるにもかかわらず、教育委員会による検証は打ち切られた。

生き残った子どもの親も辛い。まだ見つからない子どももいる中、それでも、冷静に話し合い、子どもたちの死を無駄にしたいと願う親たち。3時間を超え、それでもいまの溝を解消して、昔の大川小学校の保護者の繋がりを取り戻したいという話し合いに参加させてもらった。

8月11日にはなくなった子どもたちの慰霊を込めて、大川小学校の校庭で花火をあげたいという話になり、私たちも参加させていただくことにした。

この日、ホテルに帰り着いたのは0時半。

7月3日

昨日・今日と大川小学校校区の公民館で、昨日は保護者、今日の午前中は祖父母、午後は子ども話を聞いてきた。

今回の被害は心理的にみても未曾有のものであり、臨床心理士としても未経験の心理的負担をもっての支援になっているのは当然。それが1カ月交代で帰って行かれると、被災者の方は未解決で放り出されたような新たな傷が残っているようだった。

そのあと始末をしているのが、ずっと継続して支援に入っている現地のNPO。私も2～3月に長期に入る予定だが、日に日に4月以降も定期的に来る必要があることを確信する。

この日の午前中、公民館に集まってくれた4人の祖父母は、「親から預かっていた孫の命なのに」「学校だから大丈夫と思っていたときにはもう・・・」「孫が流されたことを知ったのは3日後だった」と泣きながら語ってくれた。

6年生と2年生の姉弟を失った祖父母は、まだ葬式はしてないという。「見つかったのは14日だけど、なかなか検死をしてもらえず家に帰った来たのは19日。治療が先だろうけど、早く家に戻してやりたかった。」「棺がないというので、チャックの付いたビニール袋のまま帰してもらった」との生の証言は痛々しかった。

祖父母たちからは、親とは違った思いを聞くことができた。

その日に来た小学6年生は、私たちの「今一番欲しいものは？」の問いに「スーパー堤防。30メートルの高さの！」と即答した。

「みんなを笑わせたくて、僕は芸をする。でも度が過ぎて大人に怒られる。僕の気持ちも分かってほしい」という小3の子どもの日記や「地震の時僕は、『地震だ！外へ逃げろ！』と校庭に走りだして、あとで先生に1時間も怒られた。大川小学校の子も僕のように怒られても逃げればよかった。大川小学校のみんなは優しすぎたんだと思う」という作文など、子どもの本音は痛烈な大人への抗議だった。



大川小学校の2階の教室

津波が渦を巻いて流れ込んだというここは、下から押し上げられたように床が壊れていた。



体育館に繋がっていた渡り廊下
この渡り廊下の上に子どもたちがいて
手を振っていたという噂もあった。

実は私は僧籍を持っている。大川小学校の保護者ケアに同行することが決まったとき、私は東本願寺に依頼し、柱の木を薄く削って作った散華（蓮の花びらを模したもの）をできるだけホテルあてに送ってもらった。保護者の方々と話した後、私は僧侶でもあることを自己紹介し、「お孫さんたちと今度会う時まで、仏様がこの蓮の花で預かって下さる・・と思って下さい」と渡すことができた。おばあちゃんたちは、大事そうになでながら「仏壇に置いとこう」と言ってくれた。

7月4日

講演「震災後の親と子のケア」仙台市福祉プラザ

放課後支援を勧める会 研修会においてPTSDやフラッシュバックのケアを基に、昨日までの大川小学校で感じたことを参考に話した。シュタイナー教育で学んだオイルセラピーや漢方から学んだこと、摩擦鍼やレメディも紹介した。

仙台市内の多くのNPO、行政（市役所健康福祉局、生涯学習課）と知り合いになれ、また私にできることを紹介できたことで、今後の連携へとつながった気がする。

3日15時～16時、子どもの村福岡の理事としてセーブザチルドレンジャパン仙台支部に伺い、東日本大震災緊急支援チーム副責任者の高井さんと仙台事務所プログラムオフィサー森さんにお会いした。先方も、子どもの村福岡とどのような協力関係が持てるかを考えておられたようで、たいへん前向きな対応だった。

4日夜は仙台医療センターの小児科医田澤雄作先生とお会いして情報交換。

家族のつながりが弱い家庭では、震災を機にくすぶっていた問題が吹き出している感じがある。震災と原発への恐れを理由に、母親が子どもを連れて実家に帰っている家庭の何割かは、夫婦間の問題が背景にあり、子どもはさらに不安定になっている。

田澤先生の友人夫婦も亡くなっており、その息子さん（高3）は寮に入っているが、お母さんからの最後の留守電を消せないという。父親の遺体はまだ見つかっておらず、休みのたびに探しに行くという。田澤先生も日曜日には会いに行っているが、掛ける言葉がないと話されていた。

5日、帰九。

今回は8月8日～12日 子育て相談・保育相談を実施し、その一方で10日～12日は被災児童への若者達による「表現&インプロワーク」をコーディネートする。月命日の11日は大川小学校に行くつもりになっている。慰霊の花火の後、一緒に行くインプロピアニストによる鎮魂の即興曲を校庭で演奏したいと願っている。このインプロワーク、音源や電源の手配も日本財団の助成に漏れたため自費である・・・。

（代表理事 山田）